

書評

海岸地帯の環境科学—生態・保全・計画

F. J. c・W. B. ヴァンバーグ著, 渡部哲光訳

古今書院, 2003, 189p, ISBN4-7722-3033-5, 4,200円

古生物学者は専門にしているタクサの現生の姿を、現生物学者に匹敵するくらい知悉しているはずである。あるいは凌駕しているかもしれない。しかし、多くのタクサにわたる生態学的問題を考え、かつ、社会的政治的現状をも鑑みて、その問題を人々に発信することまでは得意としていないであろう。本書は50年以上にわたるヴァンバーグ夫妻のサウスカロライナ大学海洋生物・沿岸研究所などをベースにした取り組みを簡潔にまとめてある。研究は精緻であり、いづれも社会への発信をふくんだものである。

表紙の写真は美しい。英語版では本の中央にあるのみだが、日本語版では2回楽しめる。写真はとても健全な環境のように見える。何か問題があるのだろうか。目次を見ていこう。日本語版に寄せて、訳者まえがき、はじめに、の後、9章にわたる内容が続き、最後に引用文献、参考文献、索引が35ページ続く。訳者と編集者の工夫で、英語版と日本語版は、全体にもほぼページ数が一致している。9章の内容は、1. 海岸地帯?その歴史と利用、2. 海岸地帯の生態的特徴、3. 海岸地帯のおもな生物生息域、4. 都市化の衝撃、5. 海岸地帯の化学汚染、6. 海岸地帯の生物汚染、7. その他の人間介入による衝撃、8. 海岸地帯に影響を与える政策および社会経済的意義、9. 海岸地帯の将来となっている。すなわち、2章と3章は海岸地帯の生態学的概説、4章から7章はいわゆる環境問題の報告で、8章にアメリカの取り組みが概説され、それを1章と9章ではさんである。8章は、ウェイン・ビームが執筆しており、少し異質な内容であるが、これが本書でもっとも利用価値のあるところかもしれない。

1章では「海岸地帯とは、各々の多様な生態的作用の相互作用によって互いに影響を受ける近接の高台と塩水域の領域を含む」と定義している。具体的には表紙の7枚の写真が示すように、砂浜、岩礁、干潟、河口域、塩湿地、マングローブ湿地、サンゴ礁、コンブ場、台地生息域などで、3章で概説してある。アメリカでは塩湿地がずいぶん広く、その研究が進んでいることを示している。

2章の海岸地帯の生態的特徴は一見するとどの生態学の教科書に載っているような概説のように見えるが、よく見ると、具体例は主にヴァンバーグ夫妻が研究してきたものであるから、現実的でおもしろい。これは4章からの環境問題のところも同じである。

環境問題としては、4章で都市化、5章で化学汚染、6章で生物汚染、7章でその他の人間介入による衝撃をまとめている。要するに人間がいなかったら、このように環境破壊は進まなかっただろうということになってしまうが、そんなことも言っていない。6章の生物汚染はおもしろい。有害藻類増殖 (HAB) として、赤潮、幻のHAB、フィエステリア・ピシシダ (*Pfiesteria piscicida*)、大型藻類があげられている。これらは日本でもっとも研究されてしかるべきところであろう。

8章の海岸地帯に影響を与える政策および社会経済的意義では、まず、連邦政府とその他にわけ、連邦政府の対応を詳述している。著者らの希望は多くの市民がこれらの情報を知悉して、連邦政府を上回る賢い市民となって、環境問題に積極的に関わっていくことである。9章の海岸地帯の将来はその延長上にあるとしている。

日本の市民がどれくらい賢いかは不明であるが、本書では、古生物学者が現生の生態学の問題に関わっていくときに必要な知識は完備されていると思う。なお、訳者は50年近く、アメリカにあって研究を続けている。そのおかげか、古い正確な日本語が散見される。原題はF. John Vernberg and Winona B. Vernberg. 2001. The Coastal Zone - Past, Present, and Future. University of South Carolina Press. である。

矢島道子 (東京成徳学園)

地質学者アーサー・ホームズ伝
地球の年齢を決めた男

チェリー・ルイス著, 高柳洋吉訳

古今書院, 2003, 290pp, 3500円+税

本書は、2000年にCambridge University Pressから刊行されたCherry Lewis著”The Dating Game; One Man’s Search for the Age of the Earth”の完訳であり、『一般地質学』の著者として多くの人が知るArthur Holmes (1890-1965)の伝記である。

この書物が私たちに示してくれるのは、まるで熱にうかされたように一生を生きた豪傑の人生である。19世紀末から20世紀の後半に及ぶホームズの人生は、ふたつの世界大戦とともに経験し—戦場においてではないが—、めまぐるしく変わる現代の社会情勢のなかにあったが、その情熱は一貫して地質学、ことに放射性元素の壊変を利用した地球年代学の確立に注がれた。いったいどんな人生だったか。本書が語ることの概略はこうなる。

ホームズの前半生は、まさに波乱に満ちている。ロンドン王立理科大学 (インペリアル・カレッジの前身)の物理学コースに学んだ彼は (幸運なことに)地質学をきわめてエキサイティングに語るワッツ教授に出会い、それに魅せられて地質学科に転科してしまった。そして当時、日進月歩で進んでいた放射壊変の理解と地質学への応用に終生変わらぬ情熱を見出した。彼はカレッジで学びながら大英博物館鉱物部での実験助手として働いたが、貧窮のためモザンビークでの鉱物探査のための探検隊に身を投じ、マラリアに苦しみながらきわめて困難な調査を遂行した。その後帰国してカレッジの実験助手となり第一次世界大戦を経験した。大戦後の経済的な困難から、ビルマ (ミャンマー)の石油会社に職を得て多大な成果を挙げたが、給料の不払いに苦しんだ上、さらにそこで彼は幼い愛息を亡くし、失意のうちに帰国した。帰国後は職に恵まれず、親戚のついでに雑貨屋の店番までもしている。

このような波乱の前半生に対し、彼はその後半生において、ダラム大学地質学科の創業者として、次いでジェームズ・ハットンの後輩となる名門エジンバラ大学の教授として、アカデミズムに安定した活躍の場を見出した。ただし周囲公然の不倫関係のなかで最初の妻を病死させたのは、まことにいただけない話である (この部分の著者の筆致は冷やかだ)。

本書は、このようなアーサー・ホームズの生涯を、ホームズをとりまく物理学の革命的進展や地球年代学のあゆみを適宜概観しつつ、丹念な資料収集の上に立って、情熱的な筆致で語っている。肩の凝らない読み物で、おそらく地質学を専門としない読者でも、遠い世代の偉大な科学者のエピソード集として読めるだろうし、地質学徒には、今では常識となっている地球年代学が、いかなる歴史を経て確乎たるものとなっていったかということに改めて興味を覚えるに違いない。

とりわけ私が感銘を受けるのは、彼が生きた時代の大学教育の姿である。彼の学部学生時代、ワッツ教授がいかに魅力的な講義をしたか。そしてその約20年後にホームズ自身がダラム大学でなしたこと、学生の興味を巧みに引きだし、学生の成長に献身を惜しまず、という姿勢は、まさにその発展形だっただろう。読後に、「訳者あとがき」に私とほとんど同じ感慨が記されているのに気がつき、思わず笑みがこぼれた。

本書のつくりの良さも、ぜひ強調しておきたい点である。ソフトカバーの造本は実に持ちやすい質感を持ち、読みやすい版組みとあいまって読書を促してくれる。原著の表紙をあしらった装丁はシンプルで明るく、そしてなによりも、本文中の図版類は原著よりも見やすいほどよく再現されている。アンモナイトをあしらった各章扉の意匠も原著に忠実に再現されており、本造りに関する熱意が感じられて好ましい。なお、作家H. G. ウェルズが地質学を履修したことがある (しかし最終試験に落ちた) というエピソード (「化石」74号, p. 92の矢島道子氏の書評参照) は、本書でも触れられている (訳書p. 36)。

栗田裕司 (新潟大学)

バージェス頁岩化石図譜

Derek E. G. Briggs, Douglas H. Erwin and Frederick J. Collier 著, 大野照文監訳, 鈴木寿志・瀬戸口美恵子・山口啓子訳

朝倉書店, 2003, 231pp, 180化石図版, 4,800円+税

バージェス頁岩の化石写真集が翻訳された。本書は2部から構成されている。第1部は、「研究史」、「地質概要と化石の保存」、「カンブリア紀の放散」から構成され、第2部はバージェス頁岩の化石写真集で、現在知られている125属のうち85属の化石が180枚の写真によって分類順に配列される。それぞれの属には、化石の復元図、生物学的解説、産出頻度、標本番号、出典（参考文献も本書の最後に掲載され、原典が参照できる）が示され、バージェス生物群の全様がほぼ把握できるように構成されている。

言うまでもなく、バージェスの生物達は恐竜と並んで古生物学分野で最も一般に知られた化石生物である。日本でバージェスの生物達が広く知られるようになったのはNHKが制作した「生命40億年はかな旅」の第2集「進化の不思議な大爆発」が放映され、渡部政隆氏訳によってグールドの有名な著作が「ワンドフルライフ バージェス頁岩と生物進化の物語」として日本語で出版されてからであろう。NHKの番組が放送された当時、大学の附属中学校へ学生の研究授業を見に行ったら、子供たちが作ったと思われる実物大のアノマロカリスが理科実験室の棚の上に飾ってあったのを見て大変驚いた経験がある。なお、上記の訳本は現在ハヤカワ文庫の一冊として安価（940円+税）に入手できるようになった。また、この文庫本の最後にある「文庫版のための訳者あとがき」には、最近のバージェス生物群に関する様々な論争やエピソードが書かれていてバージェスファンにとっては大変参考になる。

さて、それで本書であるが、バージェス生物群の全てを知りたい方には必携の書となっている。ただし、この本はいわゆる普及本ではない。読みこなすには初歩的な地質学や生物分類学の知識が必要かもしれない。しかし、それが本書を読む際の大きな障害になることはないだろう。問題があるとしたら、第1部の記述で使われている地名や固有名詞が何を指しているのかが分りにくかったりすること、使われている一部の用語に学術的厳格さを満たしていない場合があることかもしれない。本文中にある地名や固有名詞と、それらに基づいて示される写真の撮影方向を参照できる総括的な図がないため、個々の図や写真の位置関係が分りづらいことがあった。堆積と運搬の章では、「浮遊堆積物粒子の流入 (suspended sediment)」、「乱流 (turbulent flow)」、「乱泥流 (この用語は図2.5で使われているが、原書には対応する英文がないようである)」、「地滑り (slide)」などの用語が同じ現象に対して使われており、厳密さを欠きらいがある。しかし、これらの責任の大半は原著者にありそうである。こうした分りにくい箇所の一部は訳注として訳者によって補足的に説明されている。本書の圧巻は、やはり第2部の写真集である。これは見ていて実に楽しい。残念なのは、拡大率の大きい写真がやや不鮮明なきらいがある点だが、これはいたしかたないであろう。何と言っても、これまで一般に紹介されることが無かった藻類や海綿の化石などが、説明付きで一覧できることが素晴らしい。本書の最大の売りとなる点である。

本書は現在地球上に生息する大型生物の起源の鍵となるバージェス生物群を知りたい方にとって絶好の入門書となっている。バージェスファンならず、化石や生物進化に興味のある全ての方にお勧めしたい一冊である。

間嶋隆一 (横浜国立大学)

学術集会参加報告

第2回 中生代および新生代の十脚甲殻類に関するシンポジウム参加報告

第2回中生代および新生代の十脚甲殻類に関するシンポジウムが、2003年9月3日から6日にかけて、オランダ南部のボクステルとマーストリヒトで開催された。シンポジウムの会場となったのは、ボクステルの Oerstijdmuseum de Groene Poort で、ここはオーガナイザーのひとりである、Fraaije博士が館長を務める私立博物館である。博物館の規模はあまり大きくはなく、展示方法もかなりオーソドックスなものだが、オランダ、ドイツなどの中生代の化石をはじめとして、展示されている化石は非常に興味深いものが多く、レクチャールーム、図書室、実習設備なども備えており、Fraaije博士の強いこだわりを感じる博物館である。アメリカ、イギリス、イタリア、オランダ、スペイン、デンマーク、ドイツ、日本、フランス、メキシコの10カ国から40名の参加があった。今回は、第1回のイタリアでの参加者に加えて、イギリスから化石十脚類研究の大御所である Collins氏や、現生カニ類の分類体系を根底から塗り替えた、パリ国立自然史博物館の Guinot博士らの参加が実現した。初日夜の Ice breaking party につづいて、2日目がオーラル、3日目がオーラルとポスターの紹介で、4日目がフィールドトリップという日程だった。

発表の多くは、ローカルファウナや系統分類に関するものだったが、殻の微細構造や、プレパレーション・メソッドに関するものまで自由なテーマで発表が行われた。筆者らは下記のテーマで3題のポスター発表を行った。

Karasawa, H. and Kato, H. The phylogeny, systematics and fossil record of the Goneplacidae MacLeay (Crustacea, Decapoda, Brachyura) revisited.

Karasawa, H., Takahashi, F., Doi, E. and Ishida, H. First record of *Coleia Broderip* (Crustacea, Decapoda, Coleiidae) from the Upper Triassic of Japan.

Kato, H. Cainozoic decapod crustacean assemblages from northeast Japan.

各講演およびポスター発表の内容は、Contribution to Zoology の vol. 72, nos. 2-3に特集号として掲載された。また、2日目の夜にはアメリカの Feldmann 博士の呼びかけで、Treatise on Invertebrate Paleontology, Part R. Arthropoda 4. の改訂版出版に向けての打ち合わせが行われた。Feldmann博士からは、予算削減でKansas大学の出版担当人員が減らされるなどの理由で、出版が遅れている旨の説明があったが、今後一年を目処にして新規のデータ収集を終えることにしたいという要望があった。

4日目は大型バスでマーストリヒトに移動し、もう一人のオーガナイザーである Jagt博士の所属する、マーストリヒト自然史博物館の見学を終えた後、2カ所のフィールドトリップを行った。1カ所目はマーストリヒト南部の Heidelberg Cement group の ENCI Maastricht BV Quarry で、ここではマーストリヒト階上部のタイプセクション (Gulpen Formation - Maastricht Formation) の一つが観察される。この採石場からは、40種以上の十脚甲殻類化石をはじめとして、豊富な海生無脊椎・脊椎動物化石が得られている。残念ながら、我々が訪れたときは、切羽のコンディションがあまり良くなく、多くの十脚類化石は得られなかったが、最も多産する *Protocallianassa faujasi* をはじめ、参加者の多くが何らかのサンプルは得ていた模様であった。

2カ所目は、マーストリヒト東部の Geulhemmerberg Quarry で、ここではK/T境界が坑道内に観察できた。坑道は、記録にある限り7世紀以前から採掘が続いていたとすることで、網目状に縦横に掘り進まれた坑道の内部には、宗教改革の時代に旧教派が難を逃れるために作ったとされる礼拝堂があるなど歴史的名所の一つである。この坑道内にK/T境界が発見されたのは、1992年であるが、以来、様々

な分析, 研究がすすめられている。

K/T境界は坑道最奥部の天井近くに見られ, 境界の直上には厚さ数十センチにわたって7層の boundary clay layer をはさむが, 明瞭なイリジウム・スパイクは見つかっていない。境界直下数十 cm の層準に, 軟体動物など白亜紀後期の大型化石の密集層がみられた。また, 最上位の boundary clay よりさらに上位 (K/T境界より1 m 数十 cm 上位) から, 保存良好なアンモナイトが得られており, K/T境界よりも上部で, おそらくリワークではないアンモナイトが発見されているデンマークなどの地域と同様, ごく短い期間ではあるが新生代になってもアンモナイトが生息したような局所的な環境があったというような説明がなされた。

Geulhemmerbergでのディナーのあと, 2006年の第3回のシンポジウム開催地について話し合われたが, 積極的にシンポジウムを誘致していた, メキシコとドイツ南部での採決となった。結果は, 僅差でメキシコが多かったため, 第3回は2006年にメキシコ南部のChapasで, 第4回はドイツ南部で, という申し合わせとなった。その後, 大型バスの故障というハプニングがあり, ボクステルに帰着いたのが深夜となってしまったが, 一同, メキシコでの再会を期して, 翌朝, 帰途についた。

今回のシンポジウムは, 第1回のイタリアで見られた毎晩のような歓迎パーティーの嵐はなかったが, お互いに良く知り合った同じ対象を研究する者同士の情報交換, あるいは新たな研究プロジェクトのきっかけの場として, 意義深いものであった。日本での開催も話題に上りはじめている。第1回のシンポジウム以来, 化石十脚類研究者のネットワークは着実にできあがっており, 今後, さらにこのネットワークが広がるとともに, 現生・化石を問わず多様な近接領域からの参加者を得ていくことが期待される。

最後に, 本シンポジウム開催に尽力されたオランダの Fraaije 博士・Jagt 博士・Van Bakel 氏に感謝の意を表したい。また, 筆者の一人, 柄沢は財団法人日本科学者協会の海外発表促進助成 (F03-204) により渡航費用の援助を受けた。本制度は昨年より始まったもので, 年間を通じて応募できるので特に若手研究者の方の利用をお勧めしたい。

加藤久佳 (千葉県立中央博物館)・柄沢宏明 (瑞浪市化石博物館)

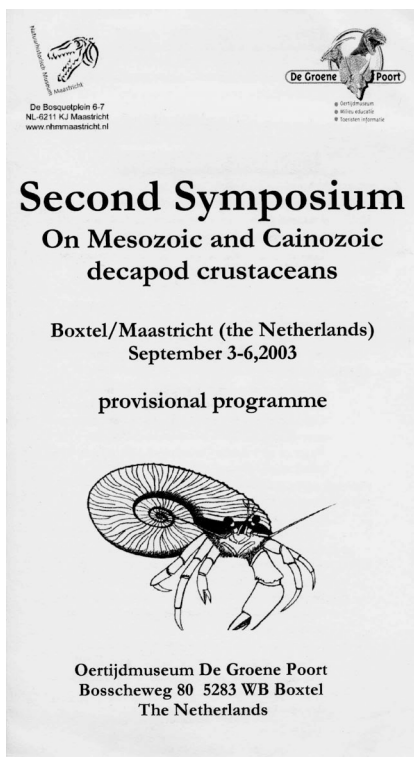


図1. 本大会のシンボルマーク。アンモナイトに入った状態のヤドカリの化石 (*Palaeontology* vol. 46, no. 1, p. 53-57) は, Oertijdmuseum de Groene Poort に展示されている。



図2. Oertijdmuseumにおけるポスター発表の様子



図3. ENCI Quarryでの巡検の様子。

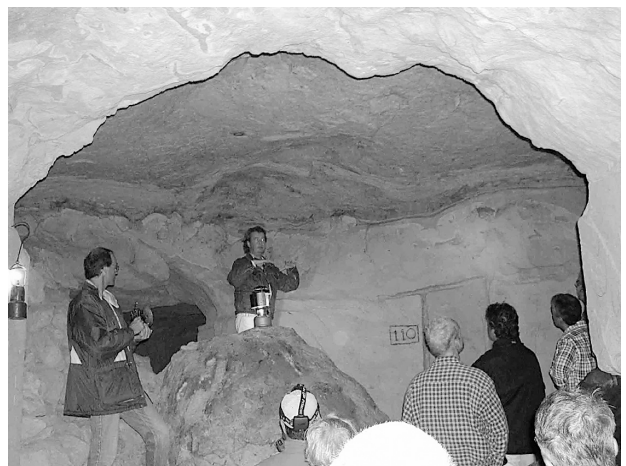


図4. Geulhemmerberg Quarryの坑道内に見られるK/T境界とその周辺。説明をしているのは, マーストリヒト自然史博物館のJagt博士。

学術集会情報

第6回国際シンポジウム「Cephalopods-Present and Past」のお知らせ

2004年9月16日から19日までの日程で、頭足類の生物学・古生物学に関する第6回国際シンポジウム「Cephalopods-Present and Past」が、米国アーカンサス大学で開催されます。参加申し込みは次のサイト (http://www.cephsym.org/about_sym/index.htm) から行えます。なお、講演要旨の締め切りは5月1日となっています。

棚部一成 (東京大学)

化石友の会

日本古生物学会「化石友の会」

「化石友の会」は、古生物学研究者の底辺を広げようという趣旨のもとにつくられた「研究者というほど専門的ではないが、化石に興味・関心をお持ちの方々」を対象とした日本古生物学会の中にある団体です。

本会会員の方々は、以下のサービスを受けることができます。

- ① 日本古生物学会発刊の和文機関誌「化石」(年2回、9月、3月発刊)の送付。
- ② 日本古生物学会の年会(6月下旬開催)・例会(1月下旬開催)のご案内[友の会会員には、参加費(含、講演予稿集代)の割引があります]。
- ③ 年会・例会に参加できない方のための講演予稿集予約販売。
- ④ 古生物学に関するご質問およびご相談の受け付け。
- ⑤ 野外巡検などのイベントのご紹介。

毎年恒例の夏季野外研修は8月1日～4日(3泊4日)に北上山地で実施いたしました。地元の博物館・セメント会社のご協力もあり、参加された方々は通常は見ることのできない露頭を見学したり、たくさんのお土産(化石など)を得ることができ好評のうちに終了しました。

また各地の県立・市立博物館などの企画展・特別展のご案内などをしております。おすすめの情報などありましたらご一報ください。

年会費(4月1日～翌年3月31日): 3,000円

正会員とのちがいは、欧文機関誌「Paleontological Research」が送付されないこと、評議員の選挙権・被選挙権がないことおよび総会への参加ができないことです。ただし、年会・例会へは参加できます。その他の点では、正会員とほぼ変わりありません。本会への入会資格はとくに定めておりませんが、会員の中には化石が大好きな中学生・高校生(ただし、機関誌などでは中学生・高校生向けの言葉づかいをしているわけではないので、少し難しいかも知れません)から、退職後、専門的な研究から遠ざかっても古生物学会からは離れたいとのことで、正会員を退会し、友の会会員に移られた方までさまざまな方がおられます。

友の会会員の方で、正会員になることを希望される方の学会への推薦も行っており、すでに多くの方が正会員として承認されています。入会の受付は随時行っておりますので、入会希望の方は、住所(郵便物等の送付先)および氏名を明記の上、下記宛てはがき・FAXなどでご連絡下さい。また、退会を希望される方も同様にご連絡下さい。諸事情で退会された方の再入会も受け付けております。

〒171-0033 豊島区高田3-14-24

(財)自然史科学研究所、日本古生物学会「化石友の会」

FAX: 03-5992-9154

e-mail: inst-nat-hist@mte.biglobe.ne.jp

アンケートはがきのご返送ありがとうございました。この集計結果をもとに会員のみなさまへのサービスの充実を図りたいと思っております。

行事予定

- ◎ 2004年年会・総会は、北九州市立自然史・歴史博物館を会場に2004年6月25日(金)、26日(土)、27日(日)に開催されます。この年会では、シンポジウム「生物イベントとしての哺乳類の海生適応」(世話人:岡崎美彦・甲能直樹)を6月25日(土)に開催する予定です。このほか会長講演(平野弘道 前学会長)も予定されております。個人講演の申込み〆切は2004年4月30日(金)です。
- ◎ 154回例会は、山形大学が中心になって、山形駅前の山形テルサを会場に2005年1月21日(金)、22日(土)、23日(日)に開催されます。この例会では、山野井徹・小笠原憲四郎両氏による普及講演会「化石から探る山形の昔」を1月23日(日)午後開催する予定です。個人講演の申込み〆切は2004年11月30日(火)の予定です。
- ◎ 個人講演の申込みは、年会・例会それぞれの〆切日までに予稿原稿を下記まで直接お送り下さい。E-mailやファックスでの申込みは、原則として受け付けておりません。また行事全般に関するお問い合わせも行事係までお寄せ下さい。
- ◎ 2004年年会・総会の個人講演で液晶プロジェクターをご使用の方は、原稿送付時に行事係までお知らせ下さい。原則としてCDを持参していただき、会場で準備したパソコンのPowerpointを使っていただく方針で現在検討中です。使用するOS、アプリケーションやそのバージョンによっては、個人でパソコンを持参していただく必要があるかも知れませんが、必ずOS(WindowsかMac)、アプリケーションとそのバージョンを明記して下さい。OHPとスライド映写機の区別、およびポスター発表希望も原稿送付時に必ずご指定下さい。
- ◎ 液晶プロジェクター等の講演用デバイスの使用手順は変更される場合があります。講演方法についての最新情報は日本古生物学会ホームページ(<http://ammo.kueps.kyoto-u.ac.jp/palaeont/>)に掲示しますので必ずご覧下さい。
- ◎ 年会・例会におけるシンポジウム企画は公募制です。企画をお持ちの方はお気軽に行事係までご相談下さい。

〒606-8502 京都市左京区北白川追分町

京都大学理学部地質学鉱物学教室

前田 晴良(古生物学会行事係)

Phone: 075-753-4158

E-mail: maeda@kueps.kyoto-u.ac.jp

〒606-8502 京都市左京区北白川追分町

京都大学理学部地質学鉱物学教室

成瀬 元(行事係幹事)

Phone: 075-753-4158

E-mail: naruse@kueps.kyoto-u.ac.jp

学会記事

日本古生物学会(2003・2004年度)

第2回評議員会議事録

日時: 2004年1月23日(金) 13:30~17:00

場所: 御所浦島開発総合センター 2F 児童婦人研修室

出席：天野，安藤，平野，北里，池谷，近藤，前田，間嶋，真鍋，西，尾田，小笠原，大路，瀬戸口，棚部
 欠席：松本名誉会長，安達（→安藤），加瀬（→間嶋），甲能（→瀬戸口），森（→池谷），小澤（→棚部），平（→北里），富田（→大路），植村（→真鍋），柳沢（→小笠原），八尾（→前田）
 書記：庶務幹事（佐々木）

報告事項

日本古生物学会（2003・2004年度）第1～3回常務委員会報告 庶務（真鍋）

- 以下の常務委員が選出された：庶務：真鍋 真，渉外：植村和彦，会計：安達修子，行事：前田晴良，会員：甲能直樹，国際交流：北里 洋，広報：大路樹生，欧文誌：小笠原憲四郎，化石：間嶋隆一，特別号：加瀬友喜，ISI：斎木健一，友の会：大花民子（会長指名），自然史学会連合：植村和彦
- 幹事を決定した：庶務：佐々木猛智，重田康成，佐藤慎一，島本昌憲，行事：成瀬 元，企画・広報：佐藤武宏，欧文誌：遠藤一佳・本山 功，和文誌：樽 創，特別号：鈴木雄太郎，友の会：川辺文久。
- 各研連委員を推薦し，古生物学研連委員（加瀬友喜，北里 洋，小笠原憲四郎，大路樹生，小澤智生），地質学研連委員（前田晴良），第四紀研連委員（河村善也），理学振興研連委員（斎藤靖二）が選出された。
- 後援：光記念館（岐阜県高山市）の「恐竜足跡展」，「恐竜ゼミナール」（濱田隆士氏），第17回国際堆積学会議（2006年）への後援名義使用を許可した。
- 国立情報学研究所へPaleontological Researchの電子化のための申し合わせ書を提出した（2003年10月14日付）。国立情報学研究所に対して電子化された学会出版物の電子ファイルの提供を求めることになった。化石31号（1982年），Transactions and Proceedings of the Palaeontological Society of Japan, New Series 61号（1965年）以降の号の電子化も依頼することになった。予稿集も依頼する案が承認されたが，以上の案を次回評議員会に諮ることになった。
- 学術賞，論文賞の副賞のメダルを廃止することを評議員会に諮ることになった。ただし（1）今年度のメダルの授与は従来通りとし，万一不足した場合には不足分のみを製作する。（2）来年度以降は，在庫が無くなり次第メダルの贈呈を停止する。（3）メダルにかわる副賞の有無，その内容については議論を継続する。学会賞の副賞のあり方については今後さらに検討することになった。

渉外（植村）

- 平成15年度科研費「学術定期刊行物」（PRに対する出版助成）90万円が入金された。
- Paleontological Researchの平成16年度科研費（学術定期刊行物）申請書を11月20日，要求額130万円で学術振興会に提出した。

会計（安達）

- 平成15年度静岡年会（静岡大学）の参加者は309名で，一般会計の収入920,600円，一般会計の支出300,000円で，会場での収支は+620,600円であった。ただし，プログラム・予稿集印刷・郵送などの諸経費を差し引くと，学会としての収支は+27,615円，特別号会計の収支は+62,870円である。
- 2003年8月26日現在，個人，会社，団体などから94件，1,003,640円の醸金が集まった。醸金者のリストは次号の「化石」に掲載される。今回の醸金は目標額に達したので終了するが，通常の醸金は今後も募集を継続することを確認した。
- 8月26日までの醸金の提供者名はすでに「化石」に報告済である。その後，4名（小林巖雄，富田 進，加瀬友喜，八尾 昭）の方々から醸金があった。今回の趣旨に対する醸金は終了し，「化石」に棚部会長名で挨拶文を掲することになった。醸金のための口座は継続される。

行事（小笠原・前田）

- 2004年1月の例会は熊本県天草の御所浦町で開催される。科研

費の「公開促進B」117万円が交付され，田代正之御所浦白亜紀資料館長の講演会を実施する。

- 2004年1月の例会のプログラム，普及講演会『天草の構造運動とそれに伴う化石群集と環境変遷』のポスターを作成中である。一般講演の発表件数は，口頭発表が39件，ポスター発表が15件である。シンポジウム『干潟の自然，その過去と現在』のプログラムが若干変更された。平野前会長による会長講演は2004年の年会で行われることになった。
- 北九州の年会では普及講演会は開催しないことになった。翌年の山形の例会では，普及講演会「化石から探る山形のむかし」が開催される。学術振興会に普及講演会開催のための公開促進Bの申請を行った。
- 2004年度年会は北九州市立自然史・歴史博物館で開催される予定である。2005年例会は山形，2005年年会は千葉で検討中である。2006年例会は京都大学総合博物館から申し込みがあった。年会・例会のシンポジウムの申し込みは，公募制であることを周知することを確認した。

会員（甲能）

- 15名の特別会員が推薦され，全員が推薦を承諾された。本年度分の差額の徴収を学会事務センターに依頼した。
- 入会希望者16名（終原礼士，北沢公太，上栗伸一，尾関邦彦，東 良雄，天野節夫，三宅 安，國分龍三，鈴木 進，堂満華子，芳賀拓真，山田一之，吉岡 翼，一島啓人，渡部武夫，澤井佑紀）の入会と，退会希望者6（千地万造，小坂橋 実，森重武浩，臼井智子，野口秀常，森下千賀子）の退会を承認した。2003年12月6日現在，総会員数1165名（国内普通会員766名，特別会員337名，名誉会員14名，賛助会員7名，海外普通会員41名）である。

国際交流（北里）

- アジア諸国における古生物学の現状を調査中である。
- アメリカの機関からPaleontological Researchが届いていないというクレームがあったため，再度発送した。

企画・広報（大路・前田）

- 学会のホームページはサーバーを京都大に置いたままファイルの更新を行う。
- 1月の御所浦の巡検は，御所浦層群，姫浦層群の2つのコースで行われる。

友の会（大花）

- 現在の会員数は124名（退会希望1名，友の会から学会会員への資格変更希望1名，会費未納による除籍12名）である。
- 会員の年齢構成を把握するために，生年月日と職業をはがきで問い合わせたところ，11月末までに126名中72名から回答があった。
- 友の会の会員名簿を作成し，会員のみ配付する予定である。

学校科目「地学」関連学会連絡協議会（間嶋）

- 2003年7月16日に第34回の連絡協議会が開催され，矢島道子氏が出席した。地球惑星科学関連学会連絡会「地学教育」委員会との関係，地学で教えるべき内容についての検討，について議論があった。中学校の教科書の見直しを行い，提言をまとめることになった。

ISI登録関係（斎木）

- ISI登録の準備の一環として，海外の出版社による出版の可能性の検討を行った。Paleontological Researchのデータと見本を送りSpringerに見積もりを依頼した結果，各号80ページ，年間320ページで見積額は年間540万円であった。昨年の発行経費は356万円であり，かなりの支出増加になるため，現実的な選択肢とはならない。他社の見積もりなどを取りながら，今後も調査を継続することとした。
- 海外の古生物学者が利用するデータベースの調査する，Paleontological ResearchのPDFファイルを期間限定で学会のホームページに掲載する，海外のメールグループへPaleontological Researchの案内を出す等の方策をとることになった。

編集状況

- 欧文誌（小笠原）Paleontological Researchは7巻4号を12月に

発行した。8巻1号には7編が掲載される予定であり、原稿は既に language editor に送付済である。2004年1月19日現在、受理済7編、修正中17編、査読中8編、受付済5編である。

- 化石(間嶋)化石75号には、口絵1編、論説1編、特集7編、ふおっしる1編、化石研究グループの紹介1編、書評3編、学術集会参加報告1編が掲載される。
- 特別号(小笠原)タイプ標本データベースの第3号は2月上旬に納品予定である。

学術会議・研連報告

古生物研連(北里, 大路):12月5日に第19期の研究連絡委員会が開催された。(1)委員長に小笠原委員、幹事に北里, 大路各委員が選出された。(2)日本学術会議の改革案, 19期の活動計画が報告された。(3)18期はタイプ標本に関する調査, 対外報告書「古生物学の現状と将来」の出版, 地方博物館の向上へ向けた活動が行われたことが報告された。(4)19期の活動方針として, 若手研究者のポスト減少の問題, 地方博物館の研究者の地位向上, タイプ標本の現状の危機的状況の打開へ向けた方策, 古生物学の啓蒙活動, 社会との接点, アウトリーチなどの項目が議論された。(5)科研費配分審査委員の選出について議論された。(6)国際会議への代表として山口委員を派遣することが承認された。(7)科研費の審査委員の推薦の制度が変更された。細目「層位・古生物」のキーワードは, 層序, 古環境, 化石, 系統・進化・多様性, 古生態, 古生物地理, 機能・形態, 古海洋に決定した。

地質研連(前田):委員長に小松正幸委員, 幹事に井内美郎委員, 玉生志郎委員の2名が選出された。

第四紀研連(河村):

- 本専門委員会については, 第18期まで第四紀学研究連絡委員会という独立の委員会であったが, 今期からは格下げとなり, 応用地質分野と一緒に地質科学総合研究連絡委員会を構成する2専門委員会の一つとなり, 第四紀学専門委員会と呼ばれることになった。
- 前期からの引き継ぎ事項として, これまでの研究連絡委員会の活動についての白書を作成することを検討する件と INQUA の日本への招致運動の今後の進め方(2007年日本招致は実現せず)について話し合われた。
- 今後の第四紀学専門委員会の活動計画:2003年12月25日にJABEEシンポジウムが開催されること, および第17回国際堆積学会が開かれることが報告されたあと, 今後の活動計画について自由討議を行った。討議の内容は, 社会に貢献できる第四紀研究を目指す必要があること, 白書の刊行や研究の質的向上の方途, 今期の委員は学術会議の改編のため1年半程度しか活動期間がないので, 活動を急ぐ必要があることなどで, 次回までに素案を用意し, さらに絞り込むこととなった。
- 2005年1月に学術会議の共催で「北淡国際活断層シンポジウム」が開催される。

理学振興研連(斎藤):

- 第1回の会合は2003年12月9日(火)に開催され, 委員長に, 江澤 洋 学習院大学名誉教授(学術会議会員・物理学), 幹事に細矢治夫 お茶の水女子大学名誉教授(量子化学・数理化学)と室伏きみ子 お茶の水女子大学理学部長・教授(学術会議会員・細胞生化学)を選出した。
- 世話人の江澤会員から, この研連の当初の性格は理学振興で教育に限らないもので, いつのまにか教育よりになっているけれども, アカデミックな方向の理学振興でよいとの経過説明があった。とはいえ, 教育に関連する話題が多く, 科学リテラシー, 後継者養成, 受験の問題, 理科教師の教育問題, 生活様式の変化と学校教育の対応, 理学振興への予算が適切に使われているか, などが議論された。
- 「理数系学会教育問題連絡会」についての紹介, 中井委員(地惑合同大会において地学教育セッションのコンビナーをつとめている)から, 地球惑星科学関連学会でもこの連絡会への参加が検討されているとの報告があった。この件については, 古生物学会

や地質学会においても検討してほしいとの要望が出された。理数系学会教育問題連絡会は, 算数・数学・理科教育に関連のある自然科学系諸学会が集まって, 社会の動向と学会の活動について定期的(2ヶ月毎)に情報・意見の交換を行ない, 必要に応じて共同して活動することを目的に, 1998年に発足したものである。それ以来, 教育課程に関する意見書の公表, 公開研究集会の開催, 科研費についての要望書の提出などを行なってきた。参加団体は以下の通りで, 地球科学関係の学会はどこも参加していない。

数学系:日本応用数理学会・(社)日本数学会・(社)日本数学教育学会

物理系:(社)応用物理学会・(社)日本物理学会・日本物理教育学会

化学系:(社)日本化学会・(社)日本化学会化学教育協議会

生物系:生物系科学学会連合・(社)日本植物学会・(社)日本生化学会・(社)日本動物学会・日本生物教育学会

自然史学会連合(植村):

- 自然史学会連合の議事録が配布された。内容は下記の通りである。報告事項:(1)日本学術会議,(2)自然史学会連合第9回シンポジウム(3)日本霊長類学会との共催シンポジウム(4)GBIF国際フォーラムの連合シンポジウム(5)第1回博物館部会合(6)連合加盟希望の日本陸水学会と日本進化学会について 審議事項:(1)次期代表候補について(2)連合活動の広報について(3)博物館部会委員・シンポジウム演者の旅費について
- 11月29日, 総会の午後連合のシンポジウム「予測の自然史科学-未知と未来へのアプローチ」が開催された。

分類学会連合(棚部):

- 2003年度のおもな活動は, 第2回シンポジウムの開催, 日本産生物種数調査の結果の公表, 進化学会福岡大会での公開講演会の開催, GBIF との共催シンポジウムの開催, メーリングリスト TAXA の開設などであった。
- 日本進化学会と日本甲虫学会が新たに加盟し, 現在27学会となった。
- 連合のホームページ上にタイプ標本データベースを検索するためのページを開設した。
- 2月1日~3月15日にジュンク堂書店池袋本店で分類学会連合の宣伝イベントを開催する。イベントの内容は, 出版物の展示販売, 学会の宣伝用チラシの配布, ポスターの掲示, ギャラリートークである。売り上げから25ないし30%の手数料を除いた金額が学会に還付される。現在古生物学会を含む18学会が参加を申し込んでいる。

将来検討委員会(北里)

2003年12月7日に第1回将来計画委員会が開催された。将来計画委員会の目的は, 古生物学および日本古生物学会の将来の発展について議論し, 何らかのアクションプランを提案することである。短期的な実行計画として, 下記の3点が課題である。(1) Paleontological Research の ISI 登録を急ぐ, (2) 将来古生物学の研究に参入する人材を確保するために, 学会のホームページに中高生向けや学部生向けの情報, 著作権フリーの画像, 講演会等の情報を掲載する。(3) 年会・例会で一般向けの企画や, 研究発表のジュニアセッションの開設, short course, workshop をさらに充実させる。中長期的な戦略では, (1) 古生物学研究人口の把握, (2) 古生物学が貢献できる分野を発展させるための特定領域研究の立ち上げ, (3) 日本全国の研究機関と学会の戦略的な協力, (4) 中央官庁に精通したスークスマンの確保, が重要である。

会員名簿作成計画(甲能:代理真鍋)

新しい会員名簿を作成する予定である。発行経費は予算通りの見込みである。

その他

- 御所浦の例会で開催される普及講演「天草の構造運動とそれに伴う化石群集と環境の変遷」に対し, 文部科学省科学研究費補助

金の研究成果公開促進費から117万円の補助を受けた。
2. 2001年年会のシンポジウムの成果が福井県立恐竜博物館の紀要に出版された。

審議事項

1. 第154回例会の開催地決定, 2004年年会のシンポジウム案の承認

第154回例会は2005年1月21日(金)~23日(日)に山形で開催することが承認された。会場は山形駅前の山形テルサ, 開催校は山形大学である。21日(金)に評議委員会, 23日(日)に公開講演会「化石から探る山形の昔」を開催する。

2004年年会のシンポジウムは「生物イベントとしての哺乳類の海生適応」に決定した。6月25日(金)に北九州市立自然史・歴史博物館で開催される。

2. 科学研究費, 配分審査委員候補者の推薦

投票の結果, 下記の配分審査委員が推薦されることになった。(1) 層位古生物学第1段審査委員: 真鍋 真, 近藤康生, 大路樹生, 西田治文, 西 弘嗣, 前田晴良, 遠藤一佳, 長谷川卓, 柳沢幸夫の9名。次点は北里 洋。(2) 地質学第1段審査委員: 松岡 篤, 磯崎行雄, 増田富士雄の3名。次点は入月俊明, 久田健一郎。(3) 地球科学第2段審査委員: 瀬戸口烈司, 北里 洋, 加瀬友喜。次点は岡田尚武。

3. 学術賞・論文賞の副賞について

学術賞, 論文賞のメダルを廃止することが承認された。ただし, (1) 今年度のメダルの授与は従来通りとし, 万一不足した場合には不足分のみを製作する。(2) 来年度以降は, 在庫が無くなり次第メダルの贈呈を停止する。両賞の副賞のあり方については今後さらに検討する。

4. データベースについて

タイプ標本データベースの1-3号(計¥12,800)を送料込みで¥10,000に割引販売することになった。個人購入の場合も, 機関購入の場合も同額である。

No. 1-3に未収録のデータは特別号 42号 として学術振興会の出版助成の獲得を待たずに, 学会の経費で出版することになった。内容は, 中生代有孔虫の一部, 古生代のアンモナイト, 古生代の二枚貝, ウミユリ類, 中生代浮遊性有孔虫, 総ページ数は約40ページ, 出版経費は30万円以下の見込みである。2004年年会までに配布できる予定である。

タイプ標本データベースを産業技術総合研究所地球科学情報研究部門の協力によりインターネット上に公開することが承認された。今後, 両者の間で覚書を作成した後に公開し, 2000年以降のデータは産業技術総合研究所が入力を担当する。ただし, (1) データベースを引用する時には, 日本古生物学会の名称が必ず引用される形式にすること, (2) 日本古生物学会の著作権について産業技術総合研究所との間で再確認をする, の2点をインターネット公開の条件とすることが確認された。

5. 学会出版物の電子化について

出版物が電子化された場合, 冊子体とPDF形式で会費を変える必要がある。PDF化によって学会に入会しない人が増える可能性がある。会費を値下げする必要がある, など予想される問題点が指摘された。一方, Paleontological Research の海外の購読会員が少ないことが問題であり, Paleontological Research の国際的な知名度を上げるためにはPDF形式を期間限定で公開するなどの方策が必要であるとの意見が出された。国立情報学研究所の電子図書館サービスに予稿集の掲載の依頼があったが, 学会の出版物の電子化のあり方を戦略的に検討していく中で, 今後検討を続けていくこととした。

6. その他

学術賞, 論文賞の推薦依頼, 推薦文の提出を電子メールで行うという提案がなされたが, 電子メールでは誤って他人に送付する危険性があるため, 正式な書類は郵便で送付し, 補助的に電子メールを活用することとした。

理学振興研連で紹介のあった理数系学会教育問題連絡会について, 地惑合同大会における地学教育のセッション, 学校科目「地学」関

連学会連絡協議会, 地学教育学会などとの位置づけなどを理解するべく, 調査することとした。

2000~2003年 交換・寄贈図書目録

日本古生物学会は交換・寄贈による内外の出版物を多数保有しております(古生物学会報告・記事no. 120, 化石56号, 58号, 60号, 62号, 64号, 66号, 68号を参照)。これらの蔵書は静岡県に寄託し, 静岡県立大学短期大学部(〒432-8021浜松市布橋3-2-3)で管理されております。図書の閲覧については静岡県企画部政策企画室(担当: 大村様, 054-221-3274)にお問い合わせ下さい。

日本古生物学会図書室 c/o (財)・自然史科学研究所

国外出版物

Argentina

Academia Nacional de Ciencias: no. 97 (1998), no. 8 (1999).

Boletin de la Academia Nacional de Ciencias: t. 64 (2000).

Australia

Memoirs of the Museum of Victoria: vol. 58 no. 1 (2000), no. 2 (2001), vol. 59 no. 1 (2001), no. 2 (2002), vol. 60 nos. 1, 2 (2003).

Records of the South Australian Museum: vol. 33 parts 1, 2 (2000), vol. 34 parts 1,2 (2001), vol. 35 parts 1, 2 (2002).

Austria

Annalen des Naturhistorischen Museums in Wien: 102 A, 102B (2000), 103 A, 103 B (2001), 104 A, 104 B (2002).

Geologisch-Paläontologische Mitteilungen Innsbruck: Bd. 21 (1996), Bd. 23 (1998), sonderband 5, Bd. 25 (2001), Bd. 26 (2003).

Belgium

Bulletin de l'Institut Royal des Science Naturelles de Belgique, Sciences de la Terre: vol. 70 (2000), vol. 71 (2001), vol. 71-Supplément (2001), vol. 72 (2002), vol. 73 (2003).

Palaeontos: vol. 1 (2001), vol. 2 (2002), vol. 3 (2003).

Bulgaria

Geologica Balcanica (Sofia): vol. 29 nos. 3-4 (1999), vol. 30 nos. 1, 2 (2000), vol. 31 nos. 1-4 (2001), vol. 32 no. 1 (2002).

Canada

Geological Survey of Canada Bulletin: no. 553 (2000), no. 571 (2002), no. 572 (2002).

China

地質学報 *Acta Geologica Sinica*: vol. 73 nos. 1-4 (1999), vol. 74 nos. 1-4 (2000), vol. 75 nos. 1-4 (2001), vol. 76 nos. 1-3 (2002), vol. 77 nos. 2-4 (2003).

Acta Geologica Sinica (English edition): vol. 73 nos. 1-4 (1999), vol. 74 nos. 1-4 (2000), vol. 75 nos. 1-4 (2001), vol. 76 nos. 1-4 (2002), vol. 77 nos. 1-3 (2003).

微体古生物学報 *Acta Micropalaeontologica Sinica*: vol. 15 no. 4 (1998), vol. 16 nos. 1-4 (1999), vol. 17 no. 1 (2000).

古生物学報 *Acta Palaeontologica Sinica*: vol. 37 no. 4 (1998), vol. 38 nos. 1-4 (1999), vol. 39 nos. 1-4 (2000), vol. 40 nos. 1, 2 (2001).

古脊椎動物学報 *Vertebrata Palasiatica*: vol. 38 nos. 1-4, supplement (2000), vol. 39 nos. 1-4 (2001), vol. 40 nos. 1-4 (2002), vol. 41 nos. 1-4 (2003).

Czech

Acta Musei Moraviae, Scientiae Geologicae: vol. 85 (2000), vol. 86 (2001), vol. 87 (2002), vol. 88 (2003).

Czech Geological Survey Special Papers: no. 10 (1998), no. 12 (2000).

Geologická bibliografie České republiky za rok: 1997, 1998, 2000, 2001.

Studie o čeledi Scutelluidae (Trilobitae), Rozpravy, Ústředního ústavu geologického, Svazek 26, Nakladatelství Československé akademie věd, 1960.

France

Documents des Laboratoires de Géologie Lyon: nos. 151, 152 (2000), nos. 153, 154 (2001), nos. 155-158 (2002).

Bulletin du Centre de Recherches Elf Exploration Production: vol. 22 no. 2 (1998).

Mémoire de la Société Géologique de France: no. 174 (2000), no. 175 (2002).

Mésogée, Bulletin du Museum d'Histoire Naturelle de Marseille: vol. 57 (1999), vol. 58 (2000), vol. 59 (2001).

Palaovertebrata: vol. 29 fasc. 1 (2000), vol. 30 fasc. 1-4 (2001), vol. 31 fasc. 1-4 (2002).

Germany

Abhandlungen des Naturwissenschaftlichen Vereins in Hambrug: NF 34 (2000), NF 35 (2002), NF 36 (2003).

Berliner Geowissenschaftliche Abhandlungen, Reihe E: Bd. 30, 31 (1999), Bd. 32-34 (2000), Bd. 36 (2001).

Berliner Palaobiologische Abhandlungen: Bd. 1 (2002), Bd. 2 (2003).
Geologisches Jahrbuch, Reihe A: heft 154 (2000), heft 155 (1999), heft 156 (2000).

Jahreshefte der Gesellschaft für Naturkunde in Württemberg: Nr. 155 (1999), Nr. 156 (2000), Nr. 157 (2001), Nr. 158 (2002).

Mitteilungen der Bayerischen Staatssammlung für Paläontologie u. histor. Geologie: heft 36 (1996), heft 40 (2000), heft 41 (2001), heft 42 (2002).

Senckenbergiana Lethaea: Bd. 80 heft 1,2 (2000), Bd. 81 heft 1,2 (2001).

Stuttgarter Beiträge zur Naturkunde, Serie B (Geologie und Palaontologie): Nr. 281-288, 292-296, 298, 299 (2000), Nr. 300-314 (2001), Nr. 315-329 (2002), Nr. 330-342 (2003).

Tübinger Mikropalaontologischen Mitteilungen: Nr. 20 (1999), Nr. 22 (2000), Nr. 23 (2000), Nr. 26 (2001).

Verhandlungen des Naturwissenschaftlichen Vereins in Hambrug: NF 39 (2001), NF 40 (2003).

Zitteliana: 21 (1997), 22 (2002), 23 (2002).

Greece

Annales Géologiques des Pays Helleniques, 1e Serie: T. 38 fasc. B, fasc. C (2000), T. 39 fasc. A (2002).

India

The Palaeobotanist: vol. 48 no. 1 (1999), vol. 49 nos. 1, 3 (2000), vol. 50 no. 1, nos. 2&3 (2001), vol. 51 nos. 1-3 (2002).

Israel

Geological Survey of Israel, Bulletin: no. 86 (2000), no. 87 (2002)

Geological Survey of Israel, Current Research: vol. 12 (2000), vol. 13 (2002)

Geological Survey of Israel, Dating of the Harrat Ash Shaam Basalts Northeast Jordan, 2000.

Geological Survey of Israel, Map of Mineral Resources in Israel, Raw Materials for the Building Industry 1:250,000, 2000.

Israel Geological Society, Abstracts: 2002, 2003.

Italy

Bollettino dell' Accademia Gioenia di Scienze Naturali: vol. 31 no. 355 (1998), vol. 32 no. 356 (1999), vol. 33 nos. 357, 358 (2000), vol. 34, nos. 359, 360 (2001), vol. 35, no.361 (2002).

Bollettino della Società Paleontologica Italiana: vol. 39 nos. 2, 3 (2000), vol. 40 nos. 1-3 (2001), vol. 41 nos. 1-3 (2002), vol. 42, nos. 1, 2 (2003).

Geologica Romana: vol. 30 (1994), vol. 33 (1997), vol. 34 (1998).

Palaopelagos: vol. 7 (1997), special pub. no. 2 (1999), special pub. no. 3 (1999), special pub. no. 4 (2002).

Atti della Accademia Gioenia di Catania, 1989.

Poland

Acta Palaontologica Polonica: vol. 45 nos. 2, 3 (2000), vol. 46 nos. 1, 3, 4 (2001), vol. 47 nos. 1-4 (2002), vol. 48 nos. 1-4 (2003).

Biuletyn Państwowego Instytutu Geologicznego: nos. 390-393 (2000),

nos. 394-399 (2001), nos. 400-404 (2002), nos. 405, 406 (2003).

Geological Quarterly: vol. 44 nos. 2-4 (2000), vol. 45 nos. 1-4 (2001), vol. 46 nos. 1-4 (2002), vol. 47 nos. 1, 2 (2003).

Prace Muzeum Ziemi, Polska Akademia Nauk: no. 46 (2001).

Russia

Paleontological Journal (Russian edition): nos. 2-6 (2000), nos. 1-6 (2001), nos. 1-6 (2002), nos. 1-5 (2003).

Proceedings of the Paleontological Institut (in Russian): T. 274, 275 (1999), T 276 (2000), T 279, 281 (2001), T 286 (2002).

South Africa

Navorsing van die Nasionale Museum Bloemfontein: vol. 15 parts 2-4 (1999), vol. 16 parts 1-8 (2000), vol. 17 parts 1-6 (2001), vol. 18 parts 1-3, 7-8 (2002), vol. 19 parts 1-3 (2003).

Spain

Boletín Geológico y Minero: vol. 111 nos. 1-6, special no. (2000), vol. 112 nos. 1-4, special no. (2001), special vol. (2001), vol. 113 nos. 1-4 (2002), vol. 114, nos. 1,2 (2003).

Revista Espanola de Micropaleontología: vol. 32 nos. 1-3 (2000), vol. 33 nos. 1-3 (2001), vol. 34 nos. 1-3 (2002), vol. 35 no. 1 (2003).

Switzerland

Revue de Paléobiologie: vol. 17 no. 2 (1998), vol. 19 nos. 1, 2 (2000), special volume no. 8 (2000), vol. 20 no. 2 (2001), vol. 21 nos. 1, 2 (2002), vol. 22 no. 1 (2003), special volume no.5 (2003).

UK

Journal of the Geological Society: vol. 157 parts 4-6 (2000), vol. 158 parts 2-6 (2001), vol. 159 parts 1-6 (2002), vol. 160 parts 1-6 (2003).

Bulletin of the Natural History Museum, Zoology Series: vol. 66 nos. 1, 2 (2000), vol. 67 no. 2 (2001), vol. 68 nos. 1, 2 (2002).

Systematics and Biodiversity: vol. 1 issues 1, 2 (2003).

The Primate Fossil Record, Cambridge University Press, 2002.

USA

Bulletin of the American Museum of Natural History: nos. 239, 240, 242, 243 (1999), nos. 247, 249, 251 (2000).

Bulletin of the Peabody Museum of Natural History, Yale University: no. 45 (1999).

Irene McCulloch Foundation Monograph Series, Hancock Institute of Marine Studies, University of Southern California: no. 4 (1999)

Novitates, American Museum of Natural History: nos. 3249, 3251-3253 (1998), nos. 3260, 3263, 3265, 3267-3269, 3271-3273, 3275, 3276, 3282 (1999), nos. 3290, 3292, 3301-3303 (2000).

Oklahoma Geological Survey, Circular: 101 (2000), 102 (1999), 103 (2000).

Paleobios, Museum of Paleontology, University of California, Berkeley: vol. 18 no. 4 (1998), vol. 19 nos. 1-3 (1999), vol. 20 nos. 1, 2 (2000).

Postilla, Peabody Museum of Natural History, Yale University: no. 216 (1998), nos. 217-220 (1999), nos. 221, 222 (2000).

Proceedings of the California Academy of Sciences: vol. 52 nos. 5-14 (2000), nos. 15-22 (2001), vol. 53 nos.1-12 (2002), vol. 54 nos. 1-27 (2003).

Smithsonian Contribution to Paleobiology: no. 88 (2002), no. 90 (2001), no. 92 (2001), no. 94 (2002).

Transactions of the Wisconsin Academy of Sciences, Arts and Letters: vol. 88 (2000), vol. 89 (2001).

US Geological Survey, Professional Paper: 729-G (2001), 1415-B (2001), 1416-F (2001), 1500-K-R (2000), 1530-B (2002), 1530-C (2002), 1561 (1995), 1600 (2000) 1601-A-B (2000), 1603 (2001), 1606 (2001), 1608 (1999), 1610 (2000), 1615 (2000), 1616 (2000), 1620 (2001), 1621 (2000), 1623 (2000), 1623 (2000; CD), 1624 (2000), 1625-B (2000; CD), 1625-C (2000; CD), 1626 (2000), 1627 (2002), 1629 (2001), 1630 (2001), 1631(2002), 1632 (2000), 1633 (2001), 1634 (2002; CD), 1635 (2002; CD), 1640-A (2001), 1642 (2001), 1643 (2001), 1644 (2002), 1645 (2001), 1647 (2001), 1648 (2001), 1649 (2001), 1650-C (2000), 1653 (2001), 1657 (2002),

1659 (2002), 1660 (2002), 1661-A (2002), 1663 (2002), 1667 (2002), 1668 (2003), 1669 (2002), 1670 (2002).

国内出版物 学会等出版物

The Island Arc: vol. 9 issue 3,4 (2000), vol. 10 issue 1-4 (2001), vol. 11 issue 1, 2 (2002), vol. 12 issue 1-4 (2003).

洞窟学雑誌: 20巻 [for 1995] (1996), 22巻 (1997).

Gondwana Research: vol. 4 no. 4 (2001).

Major Geologic Units of Southwest Japan, ISRGA Field Guidebook: GRG/GIGE Miscellaneous Publication no. 11 (2001).

大学出版物

大阪教育大学紀要, 第三部門, 自然科学・応用科学: 47 巻 1号 (1998), 2号 (1999), 48 巻 1号 (1999), 2号 (2000), 49 巻 1号 (2000), 2号 (2001).

Memoirs of the Faculty of Science, Kyoto University, Series of Geology and Mineralogy: vol. LVII no. 2 (1995).

Eureka (筑波大学総合博物館ニュース誌): 1号 (1997), 2,3号 (1998), 4号 (1999), 5,6号 (2000).

東京大学海洋研究所ニュースレター: 4号 (1999), 5号 (2000), 6, 7号 (2001), 8号 (2002).

Preliminary Report of the R/V Hakuho Maru Cruise KH-00-1, Ocean Research Institute, The University of Tokyo (2003)

Preliminary Report of the Hakuho Maru Cruise KH-01-3, Ocean Research Institute, The University of Tokyo (2003)

東京学芸大学紀要, 第4部, 数学・自然科学: 47集 (1995), 49集 (1997), 50集 (1998), 51集 (1999), 52集 (2000), 53集 (2001), 54集 (2002).

東北大学理科学部報告 (地質学): 63巻 2号 (1996).

新潟大学理学部研究報告, E 類 (地質科学): 11号 (1996), 12号 (1997), 13号 (1998), 14号 (1999), 15号 (2000), 16号 (2001), 17号 (2002).

地質調査所出版物

1:200,000海洋地質図: 50ゲンタツ瀬海底地質図 (2000), 51豊後水道南方表層堆積図 (1999), 52駿河湾海底地質図 (1999), 53ゲンタツ瀬表層堆積図 (2000), 54日向灘表層堆積図 (2000), 55塩屋埼沖海底地質図 (2001; 説明書のみ).

Marine Geological Investigations of the Tokai Offshore Area, Cruise Report no. 24, Geological Survey of Japan (1999).

博物館出版物

秋吉台科学博物館報告: 31号 (1996), 32号 (1997), 33号 (1998), 34号 (1999), 35号 (2000), 36号 (2001), 37号 (2002).

北海道開拓記念館: 研究紀要29号 (2001), 31号 (2003), 調査報告: 40号 (2001), 42号 (2003), 北の文化交流史研究事業研究報告 (2000), 北方文化共同研究事業2000-2002年度調査報告 (2003), 一括資料目録第35集北海道拓殖銀行資料目録2 (2001), 第37集旧拓殖館所蔵民族資料コレクション資料目録 (2003), 第44回特別展クビナガリュウからステラーカイギュウ (1997), '97移動展自然の恵みをもとめた古代人 (1997).

三笠市立博物館紀要: 1号 (1997), 2号 (1998), 3号 (1999), 4号 (2000), 5号 (2001), 6号 (2002), 7号 (2003).

瑞浪市化石博物館: 研究報告28号 (2001), 29号 (2002), 専報第9号 マングローブ沼の比較環境学 (2003).

単行本・商業誌

地球環境科学概説 新藤静夫・大原隆編 朝倉書店 (1996).

古生態図集・海の無脊椎動物 福田芳生著 川島書店 (1996).

生痕化石の世界—古生物の行動を探る— 福田芳生著 川島書店 (2000).

多様性の植物学1. 植物の世界 岩槻邦雄・加藤雅啓編 東京大学出版会 (2000).

多様性の植物学2. 植物の系統 岩槻邦雄・加藤雅啓編 東京大学出版会 (2000).

古海洋学の最近の進展と古生物学 月刊地球 24 巻 6号 海洋出版

(2002).

Newton 7 1998 ニュートンプレス (1998).

Newton別冊 銀河大紀行 ニュートンプレス (1998).

報告書等

石川県門前町の足跡化石 石川門前町足跡化石調査団 (1999).

石川県地質誌・補遺 紺野義夫編 北陸地質調査所 (2001).

富山県恐竜足跡化石調査報告書 富山県恐竜足跡化石調査委員会 (1997).

富田林の足跡化石 富田林市石川化石発掘調査団 (1994).

21世紀の地学教育を考える大阪フォーラム大会要項 21世紀の地学教育を考える大阪フォーラム実行委員会 (2000).

第6回アジア学術会議 日本学術振興会 (1999).

秩父宮記念学術賞記念誌 日本学術振興会 (1997).

平成10年度サイエンス・ボランチア事業 文部省専門教育課 (1998).

平成11年度サイエンス・ボランチア事業 文部省専門教育課 (2000).

第38回霞ヶ関環境講座自然科学の第一線 XVII 講演要旨・第29回地球化学研究協会学術賞 (三宅賞) 授賞研究論文要旨 地球化学研究協会 (2001).

第17回国際生物学賞一記録— 国際生物学賞委員会 (2001).

74号の訂正

P. 76の図2の説明文2行目. 誤「右上顎骨」→正「左上顎骨」.

化石74号の解説(双溝酔猿と裴文中)中にある図2の説明の2行目(76ページ右側)は「右上顎骨」となっておりますが、正しくは「左上顎骨」です。この間違いは編集委員会での校正ミスです。著者に心からお詫び致します。

化石編集委員会

P. 90の図2「第2回サメの歯化石研究の集い」の会員集合写真の出版誤り。

化石74号「化石研究グループの紹介」において使用した図(P. 90, 図2:「第2回サメの歯化石研究の集い」での会員集合写真)は、私が誤って葛袋地学研究会の会員集合写真を無断で使用しました。葛袋地学研究会の会員の方々にご迷惑および、不快な気分を与えてしまったことに対し、深く謝罪致します。

田中 猛

P. 97, 右段, タイトル下8行目. 誤「山陀(ドゥーシャントウ)層」→正「陸山陀(ドゥーシャントウ)層」

P. 99, 左段, 図3の削除.

図3は本文中に引用されている露頭とは関係のない写真です。

ロバート・ジェンキンス

編集委員会より

化石75号をお届けします。本号の特集は生形貴男編集委員の多大なお骨折りの結果です。この場を借りて御礼申し上げます。2号続けて「特集」となりました。次号の76号にも「特集」を組む構想が進められています。化石誌本来の姿に戻ったようで大変結構な事だと思っております。今後も「特集」に限らず新しい企画を少しずつでも入れて行きたいと思っておりますが、変に「予告」などすると企画倒れになったとき弁解を書かなくてはならなくなるので、「予告」は止めておきます。新着の「生物科学」誌55(3), 2004は「アカデミズムと動物園」という特集でなかなか興味ある内容です。この特集に科博の遠藤秀紀氏が「学術の異様な変貌, そして動物園」と題して大変示唆に富む論文を寄稿されています。少し長くなりますが引

用させていただきます。「今日の動物園は評価の安易な社会的貢献を求められている。評価には本来膨大なエネルギーが要るにもかかわらず、社会教育機関に適用される社会の物差しは、それ自体がコストをかけない、簡単に言えば衆愚の人気投票同然のものしか導入されてきていない。国策学術が、インパクトファクターによる思考の硬直化や経済効果による学術理念の崩壊を大学に招いたように、今後の動物園の評価はまず第一に利用者をどれだけ増やしたかであろう。どれだけ人気のある動物を集めて客に見せたかだけが問われていくだろう。（中略）これらの問題は、21世紀に生じた信じがたい愚策の結果であり、一国の指導者が学術継承とテクノロジー推進を区別できない愚か者であり、彼らが学術を効率化と結び付けるという根本的矛盾に陥ったことを意味しているといえよう。明治期から提唱・実行されてきた学術自治の精神も、戦後とりわけ力を入れられた教育と行政の分離も、国力を拝金に置き換えた昨今の乱暴な変転の中で形骸化を進めてしまった。そしてそれは、動物園にも大学にも形を変えて同時に起こってしまったのだ。（同誌、p. 134）。編集後記によれば遠藤秀紀氏は“闘う解剖学者”だそうです。かっこいいなと思いました。

間嶋隆一

今号の特集は「生物多様性と古生物学」です。生物界は確かに驚くほど多様多彩ですが、一方で多くの非適応的変異が淘汰されてきたであろうことを思えば、現実の生物界はその潜在的多様性に比してそれほど多様ではないという見方もありうるでしょう。つまり、自然を秩序だったシンプルなものと思わず、無限の多様性を当たり前のことと考えるか、前提となる世界観の違いによって現実の生物多様性に対する評価が変わるのではないのでしょうか。近年多用される「生物多様性」というテキストの意味は、今日の生命観が共通

性・規則性の自然観に支配的な影響を受けているというコンテキストの中で理解する必要があります。

翻って、最近学校や社会で「個性」という言葉がさかんに使われています。しかし一方で、現実の社会において歓迎されざる個性というものが少なからず存在するのも事実です。昨今における「個性」強調の風潮は、効率・合理主義への過度の傾倒という社会的背景を踏まえた上で受け止められるべきでしょう。もっとも、現代社会へのアンチテーゼとして「個性」を強調する場合にも、「病気もその人の個性のうち」というように個人の尊厳を謳う場合と、「閉塞感のある社会を打破する個性」というように異能・偉才の発掘を奨励する場合とがあります。人間の尊重という文脈と社会的評価という文脈とでは、当然「個性」という言葉に込められる意図は違います。もしこのようなコンテキストから切り取られて「個性」という言葉が独り歩きを始めると、その言葉で表されるものを対象とする行為、つまり尊重と評価の同一視という錯覚が生まれてしまう恐れがあります。ファッションナブルな言葉ほど独り歩きしやすいので、翻弄されないよう注意を要します。

今、「個性の光る大学」が求められています。各大学がどれだけ独自性を出したかが評価基準のひとつになるようです。地方大学の多くは、“生き残る”ために独自性を模索していることでしょう。ひとつの大学が独自性を出すには、その中での資源分配は偏らざるを得ず、そのために大学内での評価を得るための分野間競争のような構図が促進されることが予想されます。こうした中であって、科学行政が生み出した標語に翻弄されて尊重と評価を同一視することなく、互いの学問分野を尊重し合いながら切磋琢磨してゆきたいものです。

生形貴男